



対馬丸記念館と、遺族・サポーターを結ぶ、ふれあいの情報誌

対馬丸 通信

発行：(財) 対馬丸記念会
発行人：高良 政勝
編集：対馬丸記念会事務局

Tsushima maru press

平成 19 年 3 月 15 日発行 第 12 号

特集 『対馬丸沈む』

昨年発刊した『対馬丸沈む』が、静かではあるが徐々に反響を巻き起こしています。

戦時下でも、まだまだ天真爛漫な子供たちの様子も伝わるように、豊富な挿絵とともに書かれた本書は、事件の悲惨さを伝えるだけでなく、当時の子供たちの様子も生き生きと活写されています。

まだお読みになっていない遺族及び協力会員の皆様に改めて、本書の概要と反響等をお知らせ致します。

本書「発刊にあたって」より

この本が、罪の無い子どもたちが戦争に巻き込まれていった歴史的事実を多くの人たちに伝え、平和の尊さを知ってもらうよい教科書になると信じている。

そのことがとりもなおさず、犠牲になった人々への鎮魂になり、また、遺族へ対して慰謝にもなると信じて刊行を決意した。

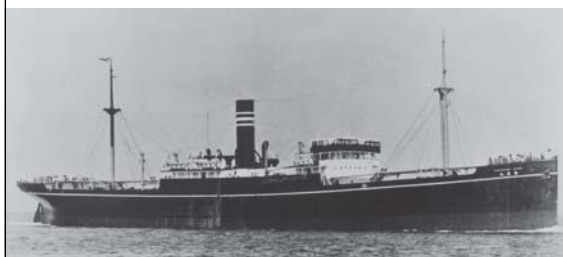
多くの人がこの本を読まれ、犠牲になった人々の果たせなかった夢と希望を実現することを希望する。

財団法人 対馬丸記念会会長 高良 政勝

対馬丸 沈む

上原 清 著

垣花国民学校四年生
上原清 地獄の海より生還す



巻頭随想

命の尊さ

対馬丸記念館館長 高良 政勝

年明けに「難病と戦う子供たち」というテレビ番組を見た。幼児のとき全身の骨の成長が止まるモルキオ症候群、脳の大きな血管が消失し細い血管のみになり、泣いたり運動するだけで命取りになるモヤモヤ病、全身の筋肉が徐々に骨になっていく進行性骨硬化性筋炎、生きるためのエネルギーを作れないミトコンドリア病など。医療に従事する自分ですら聞いたことのない色々な病気、そしてその難病に真正面から立ち向かって行くいじらしい子供たちの姿、それを支える家族の涙ぐましい努力と忍耐。見ているだけで胸が熱くなり、「頑張っつて!!」と声をかけたくなる。

一方、日々の新聞の社会面を見ていると、想像を絶するような凄惨な事件がこれでもかこれでもかと続く。親が子を、子が親の命を奪い、兄が妹を、妻が夫の命を奪う。人の命を奪うということはどのようなに弁明しようとして正当化されるものではない。しかしこのごろの殺人には言いようのない恐ろしさを覚える。

難病と戦いながら、いじらしく遅く生きていく人たち、いとも簡単にしかも残酷な殺し方をする人たち。どちらも自分と同じ人間なのだ。僕自身の心の中にも、やさしい思いやりの心と隣り合わせに、残忍な悪魔の心が潜んでいるのであろう。そしてこれは特定の人に限らず誰の心の中にも。

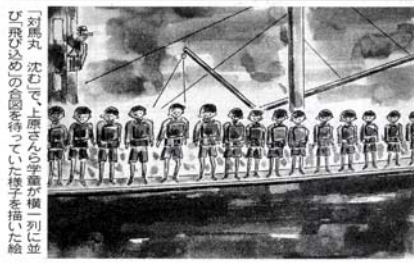
人間は長い歴史の中で多くの人と付き合い、少しずつ学びながら悪い心の扉を懸命に閉じてきた。しかし今、その悪い心の扉の錠が緩んできたのではないか。なぜ?.....。スーパーやコンビニレジ係の画一的な言葉づかい(対人関係の規格化)。友達とのコミュニケーションを携帯電話でする中高校生、手のひらに入るほどの小さなプラスチックの中でバーチャルな生き物を飼う小学生たち、人間の声に反応しサビスをするロボット。便利な世の中になった反面、顔を見ての会話や相手の反応を見ての行動、思いやりが出にくい環境になったのも心の扉の錠がゆるくなったことと無関係ではないように思われる。便利な世の中の中の延長線上にいじめ、殺人があったとしたら.....。

今こそ求められているのは命の教育ではないだろうか。人の命の未来にはそれぞれの夢と希望があふれているはずである。それを奪う権利は誰にもない。

六十三年前、夢と希望に胸を膨らませ疎開船対馬丸にのり、無念にも海底へ沈んでいった子供たち。戦争の犠牲になった彼らと、いとし我が子を失った親たちに思いをはせ、一人でも多くの人が対馬丸記念館で、命の尊さ、平和のありがたさの意味を感じていただきたいものである。

沖繩戦で米国潜水艦の攻撃を受け沈没し、1484人が犠牲になった学童疎開船・対馬丸の生存者の上原清さん（72）は19日、撃沈から62年となる22日の慰霊祭の前に那覇市の対馬丸記念館で記者会見し、自らの体験をつづった手記「対馬丸 沈む」の出版を発表した。戦後50年間、心を閉ざし対馬丸について語らなかつた経験を経て上原さんはその後10年かけて横年の思いを本に著せたことに「多くの犠牲者の魂を背負って来たが、その重い荷物を降ろせた。感無量」と涙交じりに語った。またこの日、犠牲になった学童や引率者の遺影20人分も追加展示された。遺影は計262人となった。

対馬丸撃沈62年



友の魂背負い 悲劇語り継ぐ

生存者の上原清さん 10年かけ手記を出版

戦後50年間、対馬丸の年々たどる、かひ含の体験を一切閉ざす心を閉ざし、呪縛があったかもしれない理由について「国少が、自分でも理由はつき



涙交じりに対馬丸沈没の体験を語る上原清さん＝19日午後、那覇市若狭の対馬丸記念館

りに話した。だが「うれしい」と涙を流し「対馬丸に関する誰も知らない事実を生きたわたちゃんから尋ねると、本願寺は海に沈んだし埋めなければ犠牲者にとまらなかつた」と一語に申し込みたい」と思い、執筆白紙を買いに行った思い。幼少の上原さんの生活に取り組んだという。対馬丸と運命を共にした、幼少の上原さん、当時にもある無邪気な子供の生活様式を描き、読者対馬丸の体験へ引き込む工夫の書店店頭に並ぶ予定。

出が鮮明に残っているといから対馬丸沈没、漂流して生還するまでの体験をつづった。本の特徴について「こころのこころ、全百七十五頁、千五百十感の写真を家族からの生活様式を描き、読者対馬丸の体験へ引き込む工夫の書店店頭に並ぶ予定。

新たに遺影20人展示 記念館

『琉球新報』平成18年8月20日朝刊

昨年の開館二周年にあわせて発刊した上原清著「対馬丸 沈む」の反響が、県外においてじわりじわりと広がってきました。別掲の大城立裕先生の書評にもあるように、挿絵を豊富に挿入し、小学校四年生以上を対象にした、すばらしい本に仕上がっています。本土からの反響などを報告いたします。

発刊後、高良会長が友人・知人に配布したところ、早速以下のような反響が返ってきました。

当時の皆様のご苦労が、どれだけだったか想像もつきません。私も学徒動員で辛い目に会いましたが、何故か戦時中の事は誰にも話したくない心境でした。今、あの対馬丸記念館に埋めつくされた絵や当時の様子がこの方の原書であったのかと思ひ出されます。開館式に伺った時も、涙で会場をまわる事が出来なかつた事を覚えていますが、今日職員に話しますと、皆が是非という事でお手数をおかけいたしますが三十冊送って下さい。

（京都市 信ヶ原千恵子）

先週末、帰ってきて、上原氏の著書「対馬丸 沈む」が送られてきたのを知り、よくよく読む。よく書かれている。イメージがわく。臨場感がある。この本をあちこちに送りたいと思う。戦争の悲惨さを子供達に伝えるために。小生の小学校、中学校、高校及び高校旧友に配布するので三十冊送られたし。

（大阪市 土肥義胤）

また、同書に出てくる著者の幼なじみ「シーちゃん」の妹、又吉邦子さんの孫、橋本滯さんが、川崎市教育委員会から自由研究と読書感

想文の二つで表彰を受けました。去る二月十日に、橋本滯さんのご家族と石倉康治ご夫妻が対馬丸記念館と上原清さん宅を訪れ、受賞の報告をしました。

上原さんは、滯さんに「これから対馬丸のこと、家族のことを忘

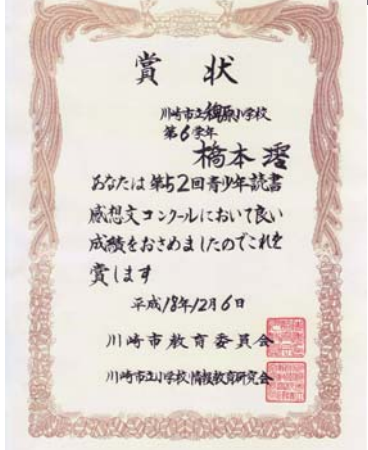
れずに、頑張ってください。」と激励しました。

また、自由研究の作品を寄贈して頂きましたので、今年度中に公開を予定しています。

今回上原様の本「対馬丸 沈む」をいただき、仕事も放りだして読ませて頂きました。

涙が出て涙が出て、字もかすみ

また、同書に出てくる著者の幼なじみ「シーちゃん」の妹、又吉邦子さんの孫、橋本滯さんが、川崎市教育委員会から自由研究と読書感



表紙に「垣花国民学校四年生 上原清 地獄の海より生還す」とある。その体験記だが類書に見られない圧倒的迫力の源は、その自筆挿絵にある。一六五ページの本文にはさまれた挿絵が一一五枚。学童八百余名の海難の記録だから、その図柄に人物群像が多くなるのは当然だとしても、その数およそ四六〇人と私は数えた。数のみではない。人物の角度、距離感、構図の多様さは、その向こうに数百人の学童遭難者がいることを、十分に想像させて、素人離れという以上に、神がかりにさえ見える。

文章だけでは表現できないからと著者はあとがきで言うが、その祈りの執念がこれだけの写真になったのではないか。その写真は襲いかかるフカたちの群れにも及ぶ。これは確かに、文章では無理だろう。

これは単なる挿絵ではない。例えば演劇における舞台装置ほどの意味と重みと説得力をもつものである。

生き残った遭難者の多くがイカダ（船にたくさん用意されていた）に乗ったのに、著者が乗ったのは、たとえば大きな教壇をひっくり返

したような箱であった。その向こうを、丸太につかまった少女が流れていった。あの少女はどうなっただろうか。生死を分ける凄絶な一期一会が無数にあった。

著者は対馬丸の生き残りだということ、戦後五十年ほどひた隠しに生きて、ようやく実録を書く気になったという。

記憶のみによるとき、この種の記録はえてして感傷に流れがちだが、ここでは記憶のみでなく、関連する資料にあたり、人に会い、巨視的な視覚を失っていない。そのなかでもしかし、初恋の相手ともいえそうなヤマトンチュらしい少女への思いが、腕白仲間たちへの思いにまじって――彼女が死んだかもしれないというくだりは、さりげないが悲痛で、感傷と普遍的な問題提起がよく調い合

わさり、これだから戦争の最大の犠牲者は子供だと、説得する力をもつ。

一昨年に創建された対馬丸記念館には、挿絵の彩色原画が数多く展示されていて、多くを語っているが、この本の挿絵の最後は仏像であり、このことが一冊の意味を十分に語っている。全編が祈りに満ちた本である。

平成18年10月22日朝刊より転載

■琉球新報書評欄から

重みと説得力を持つ挿絵

作家 大城立裕

読書感想文

祖母の姉石倉静枝さんのこと、平和のこと

川崎市立稗原小学校六年

橋本 漣

リリリン。私の家に一本の電話がありました。祖母からです。

「漣、今すぐテレビをつけてNHKをみてみなさい。」※1
そう言われたのであわててテレビのチャンネルを合わせました。その時、目をまるくしてしまった私。なんと疎開船対馬丸が沈没した時の、とても少なかった生存者のひとり「上原清」さんが、戦争で亡くなった祖母の姉、静枝さんと対馬丸の中でいっしょだった話をしていたのです。清さんは、しーちゃん（静枝さん）の幼なじみだったらしく毎日遊んでいたそうです。それを聞いていた私は、「清さんが静枝さんのことを語っているよ。今の小学生に戦争の悲惨さや、恐さを語っているよ。」と、天国にいる彼女に教えたくまりました。

これが、対馬丸に何が起こったかを知りたくなくて本を読んだきっかけです。

祖母の姉「石倉静枝」さんは、太平洋戦争中に十一才で親や兄弟と別れて、対馬丸に乗って疎開しようとしていました。対馬丸に乗っていた人は、千六

百六十一人いました。しかしアメリカ軍の攻撃により約十分で沈没し、同時に千四百八十四人も人たちが犠牲となってしまったのです。

私はとても悲しく思いました。乗っていた人たちは何の罪もおかしていないし、安全な所へ行こうとしていたのに、地獄を味わっているとしたくありませんでした。

対馬丸の本を読んで強く感じたことが他にもあります。沈没してから海に落ちたイカダにつかまる時に、大人は自分が生きる事だけを考え、子供がイカダにしがみつくとなぐって落としたそうです。何てヒドイことをするのだと思いました。自分の命を大切にするのはいいけれど、人の命をそまつにすれば死にそうな状況になると、人は悪魔になってしまうのじゃないかとも思うのです。今の私達はこの様な経験をしたことがないので、大人は子供を助けたりするけれど、あの状況になったらやっぱり人の事は考えられないと思いました。戦争は人を変えてしまうことが、

この本でよくわかりました。

あなたが思う平和とは何ですか。友達や家族と一緒にいられることです。アイスクリームを食べたり、遊んだりすることですか。六十年以上前、沢山の子供達が戦争に巻きこまれていたのです。それを皆さんはどう思いますか。今の暮らしがとても幸せだとは思いません。そう思うなら今の自分の命を大切に、自分以外の人の命も大事にしてあげてください。きっとその気持ちで一人一人が持つていけば戦争は起きないでしょう。そう願っています。心から大切だと思います。そして静枝さんや対馬丸のことをいつまでも忘れないでいる。

それが私が始められる、平和への第一歩だと思えます。

橋本漣さんは川崎市在住の遺族、又吉邦子さんの孫で、この「対馬丸沈む」の読書感想文で同市教育委員会より表彰されました。

※1 NHK 教育テレビ 「シーちゃんを忘れない」 平成17年9月放映

記念館運営日誌

□11月14日

故橋本元総理のご子息、衆議院の橋本岳代議士が、嶺井元沖繩県副知事の御案内で記念館にお見えになりました。橋本元総理が深く関わった対馬丸について、ご自身ももつとお知りになりたいと訪れたものです。御父上同様、良き理解者として活躍して下さるようお願い申し上げます。



□12月2日

神戸市立福池小学校の大野勉先生が、千羽鶴を携え来館されました。これは、同校四年生が総合学習で「平和」について取り組み、学習の最後に「対馬丸の犠牲者に千羽鶴を捧げよう」ということになり皆で折り上げたものを、先生に託したものです。先生は「こうした

学習が五年、六年と成長するにしたがって、改めて平和を考えていくためのスタートになると信じています」とおっしゃっていました。



□12月11日

厚生労働省社会・援護局援護企画課池田真之経理係長と、厚生労働事務官渡辺康司氏のお二人が視察に見えました。平素、遺族相談事業に於いてご指導を頂いているお二人に、記念館の展示をじっくりとご覧頂き、理解を深めて頂きましたことに感謝申し上げます。



□12月16日

遺族の故国吉ユキさんのご親族が、記念館の平和活動に役立てて下さい



と、香典返しを記念館にご寄付下さいました。

□12月16日

垣花国民学校第34期卒業「ガジャンピラ会」(渡慶次正一会長)は、語り部の講話用に、ホワイトボードを記念館にご寄贈下さいました。これは、語り部の友寄賢吉さんが垣花国民学校同窓会(儀間真勝会長)へ寄贈依頼を働きかけていたところ、「ガジャンピラ会」が、同会独自で寄贈したいとの申し出で実現したものです。当日は同窓



会長で生存者・語り部の儀間真勝さんも贈呈に立ち会って下さいました。

□12月17日

対馬丸追体験ツアーを実施するなど、平和活動等にも積極的に取り組んでいる沖繩尚学高等学校の国際交流クラブが、那覇西ロータリークラブの学校交流プログラムで、プロジェクトを使って追体験ツアーの発表を行いました。



その後、バザー等の売上金が対馬丸記念館へ寄付されました。

□1月19日

東京在住の遺族、中園博文さんより小桜の塔刻名碑のペイント補修のご寄付がありました。これにより刻名碑の氏名がくつきりときれいになりました。



□1月25日

第五回対馬丸ガンジュー講座「ちいーちいーかあーかあー」が沖繩南部地区歯科医師会のご協力で開催されました。さわやか歯科医院の城間健生先生の講演は、嘸



下障害を予防する健康体操や、口の筋肉を鍛える発声練習など、具体的に楽しい講演でした。

訃報

当財団評議員、生存者で遺族の湧川裕育さんが昨年12月28日お亡くなりになりました。

開館前からいろいろと貴重なアドバイスを頂戴し、開館後は語り部としてもご活躍を頂きました。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

去る2月17日には、湧川さんのご家族が記念館を訪れ、故人の遺志に添えて下さいと、香典返しをご寄付下さいました。